

〔論説〕

没倫理的な日本の倫理の構造

佐伯啓思

一

前々回の論考（『日本的倫理観について』第三〇号、二〇二二年）において、私は、本居宣長の「神の道」や九鬼周造の「自然（ジネン）」等を概観しながら、日本人の倫理観の基本構造をみてみたいと思った。もともと「日本人の倫理観」とはいつてみたが、それはきわめてつかみづらい。西洋の倫理観をカントに代表させることが適切かどうかはともかく、少なくともわれわれ日本人（もしくは日本の知識人）にとつては、カントに示されるような、人間の理性と義務によつて着色された倫理の普遍的観念が西洋思想にはある、と思われてきた。

この絶対的ですしきりとしたしかも普遍的義務の装いをまとった倫理観からすれば、日本人の倫理観念は、確かな「倫理観」というよりも情緒的な「倫理感」という方が適切にみえる。それは、いかにも状況次第であり、感覚的であり、相対的であり、時には他人任せであり、また場合によれば上から目線の権威依存の流儀にみえる。それゆえに、日本には倫理的な主体の観念が薄弱であり、責任の観念も薄い、ということになる。

かつては、この原因を、もっぱら日本の近代化の遅れ、市民意識の未成熟といった歴史的・文明的な後進性に求める進歩派の定型的図式が支配していたが、さすがに近年は、そんな図式を述べたてる者は少なくなった。それに代わって、これは、日本社会のかなり根深い構造であり、近代化によって解消できるようなものではない、という悲観的だか楽観的だかよくわからない議論が旺盛になった感がある。

新型コロナ下でよく論議されたような、同調圧力、空気の支配、誰が責任者かよくわからない無責任構造、その場しのぎの状況対応。こうした没倫理的な社会心理こそ日本の精神風土を示すものだ、といわれる。

しかし、多少面白いことに、それではこれに対する欧米型の、政府によるいささか強権的なロックダウン方式のごとき強力な規制や行動制限が望ましいのか、となると、無条件に賛同する者はめったにいない。欧米型の政府対市民社会という構図に基づく自由の規制というやり方そのものが日本には妥当しがたいと多くの者が感じる。まして中国の強権方式に共感を表明するものはまず存在しなかった。となれば、万事をうす曇りの空のようにぼやかして、誰が何を決めているのかよくわからないという亡羊たるやり方で危機をやり過ごすという、なんとも亀が甲羅から首を出したり引つ込めたりという状況対応型の方式もまたある種の知恵のようにもみえてくる。

強権的な、またそれゆえに強い責任をも望まず、中央司令塔の欠如にもかかわらず、この亀の流儀がそれなりにうまくゆくとすれば、似たような人々が同じような情報を共有して、相互に同調圧力を行使し、その結果、一種の空気の支配が生まれ、そのなかで状況に追従してゆけば何とかなる、という「日本型倫理」の構造がそれなりに作動している、ということであろう。

それにもかかわらず、人々はこの構造をこれでもかと批判する。「同調圧力」や「空気の支配」、「状況追従的」という言葉そのものが批判の意味あいを帯びているのである。かつては、日本社会の後進性を訴えたのはもっぱ

ら知識人層であったが、今日では、別に西洋近代市民社会などという虚構に毒されたこともないはずの人々も、「日本社会は同調圧力が強くて空気に支配されて生きづらいものだ」などと平気で口にする。こうなると人々は被害者なのだから加害者なのだから、よくわからない。いや、相互的な同調圧力の中で生息しておれば、すべての人々が被害者であり、また加害者なのであろう。だが西洋近代市民社会でもこれは似たようなもので、まさにヘーゲルが見通したように、自由と平等の近代社会とは、すべての人々が支配者であり、また同時に被支配者でもあるような社会なのである。ここでは誰もが「自分は何者かに支配されている」といいながら誰もが他人を支配している。

前置きが少々長くなったが、私がここで問題としたいのは次のようなことなのである。

「同調圧力」「空気の支配」「無責任体系」「状況追従的」……。何といおうと、この「日本的な没倫理」と思われる構造を生み出したものは一体何なのか、そして、本当に日本は倫理観の欠如した社会なのか、ということである。

丸山真男の名前を持ち出すまでもなく、多くの人は、この倫理観の欠如と「日本の自然観」とを結びつけようとする。日本人の思考には、「日本の自然観」が強く影響しており、その自然観こそが、日本人に対して強い確固たる倫理的精神の欠落をもたらした張本人である、というのである。

通常、「自然」は「人為」と対比される。倫理は人間集団や社会の行動規範に関わるから「人為」の側に配置される。その結果、この対比をとれば、「自然」には特に倫理を生み出す動因はなくなるのであり、自然は人間の主体や意思や意図などとは無縁になる。その結果、西洋思想の中心がそうであるように、自然は人間の人為に

服するものとして、人間の管轄下に置かれることとなる。

だが、日本の自然観の特異性は自然が人為の対象となるのではなく、それは、人間の作為を超えた、もしくはそれを飲み込んだ自動的作用とみなされる点にある。だから、日本の倫理観も自然から独立するのではなく、自然の動きそのものから分離されえない。その結果として、日本の自然観を背後に置く限り、日本人の主体意識も倫理観念も、まさに亡羊とした自然観のうちに溶解してしまう。かくて、日本的な自然観こそが、日本の倫理意識や主体意識の自律を妨げている。こういうことになる。

日本の自然観とは、自然＝ジネンというように、物事の推移を「あるがままにまかせ」あるいは「おのずとやるがごとく」といった人為、人智を超えた超越的な動きに委ねるといふ精神的な構えをいう。川の流れや四季の移ろいがそれを象徴するとしても、日本の自然観においては、山川草木から人間の営為までを包括する森羅万象がこの「おのずとなるがまま」に従う。自然というものがもつ大きな働きを人は受けとめるほかない。そこには、人の理解を超えた、それこそ「おのずと出来る」としかいいようのない秩序が存在する。

そしてもしそうであるなら、ここに人間の創造性や変革の意思や設計的な理性などの作用する余地はない。「人間が歴史を作る」などという西洋的進歩派の観念は致命的な思いあがりすぎないであろう。あるいはまた、人間が、天の道を知ること、そこに己を強く律するべき倫理や道徳、つまり道が示されるなどという中国的な宇宙的秩序の観念とも無縁なのである。

もしも、日本人の社会秩序観や歴史意識が、万事「あるがまま」「なすがまま」「おのずから」といふような自然観に立脚したものとすれば、社会秩序を作り出す主体や歴史を動かす主体が存在しないのは当然であろう。明治に西洋から導入されたネイチャーの訳語として「自然」という古来からの日本語を当てはめたとき、「自然」

についての誤解が生じた。というより、古来の日本の自然観念が西洋的近代のものへと転換を余儀なくされた。しかし本来の自然である「ジネン」に立ち戻れば、近代的な主体や責任や変革や自己規律などという観念がいかに西洋模倣の産物であるかは明らかであろう。

だがそのことを逆からいえば、日本の伝統的な自然観こそが、日本社会から、自己責任や理性的自我や歴史の進歩というような明快な語句から構成される近代的思考をうばい取ることとなったともいえよう。なぜなら、「おのずとあるがまま」をよしとする「思想ならざる思想」つまり日本の「没思想的思想」からは、単なる現実への追従、世界（世間）への同調しか出てこないからである。そこには、価値の基準が存在しない。確かな、普遍的で不変な価値を打ち立てる作爲が存在しない。したがって、価値なき社会の倫理は、他者への追従、歴史への追従という意志の欠如でしかない。

このような没倫理的社会にあつて、どこにもみあたらない自己や人格のかすかな不満を言葉にするとすれば、「同調圧力」や「空気の支配」や「無責任体系」といった言葉が口をついて出てくるであろう。このような不満や批判は、その根底に価値の絶対性、普遍性を求めるといふ西洋的思考を前提としている。そのように明言されることはないが、西洋的思考のパラダイムが暗黙裡に持ち込まれている。だがまた、われわれは、果たしてそのパラダイムの就縛から逃れることは可能なのであるか。

言い換えれば、日本人には本当に倫理的観念はないのだろうか。日本の自然観に依拠した「日本的な倫理」というものは存在しないのだろうか。